

日本宗教学会第77回学術大会

2018年9月9日

第5部会パネル発表

# 「身心変容技法と霊的暴力」

鎌田東二

鶴岡賀雄

井上ウィマラ

永澤哲

島蘭進

# 「身心変容技法」のいろいろ

- 「身心変容技法」とは、「身体と心の状態を当事者にとって望ましいと考えられる理想的な状態に切り替え変容・転換させる知と技法」
- 古来、宗教・芸術・芸能・武道・スポーツ・教育などの諸領域で様々な身心変容技法が編み出された。
- たとえば、祈り・祭り・元服・洗礼・灌頂などの伝統的宗教儀礼、瞑想・イニシエーションや武道・武術・体術などの修行やスポーツのトレーニング、歌・合唱・舞踊などの芸術や芸能、治療・セラピー・ケア、諸種の教育プログラムなどである。
- それら身心変容技法の多くは、師から弟子へと伝承され、追体験と吟味を重ね、実践と経験のふりいにかけられながら再編成・再構築されてきた。

# 身心変容技法を支える身心哲学(身心観・身心存在論)と身心機能論(身心や霊性の存在やはたらきに対する考察、あるいは身心認識論)

- ①身心あるいは霊性はグラデーション(層位)を成しているという思想(一番シンプルなものは見えない身体性があるというアイデア)
- ②修行や体験によって、そうしたグラデーション(層位)を上昇し、浄化し、レベルアップしていくことができるという思想と実践段階の設定
- ③そうした深化・参入過程に、自力であれ、他力であれ、ある超越的な力がはたらいて、身心境位が飛躍的に向上するとする思想と、あらゆる超越的な力の介在を認めず、明確なプログラムに沿って漸次的・段階的に進展していくとする思想の2種がある

# ヨーガや仏教の身心変容技法の2類型

## ■ 足し算型自己変容

■ ①密教的瑜伽的聖道門

■ ②身心莊嚴化・如来化

■ ③合一・加持

■ ④三密加持・曼荼羅觀

## ■ 引き算型自己変容

■ ①禅的聖道門・易行門

■ ②身心剥脱化・無化

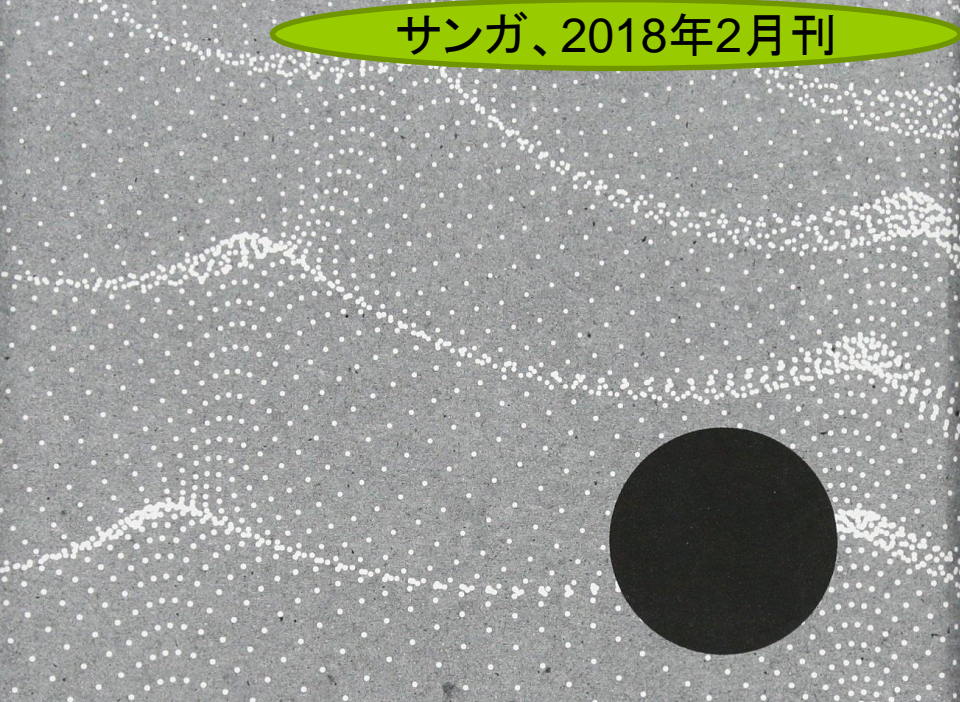
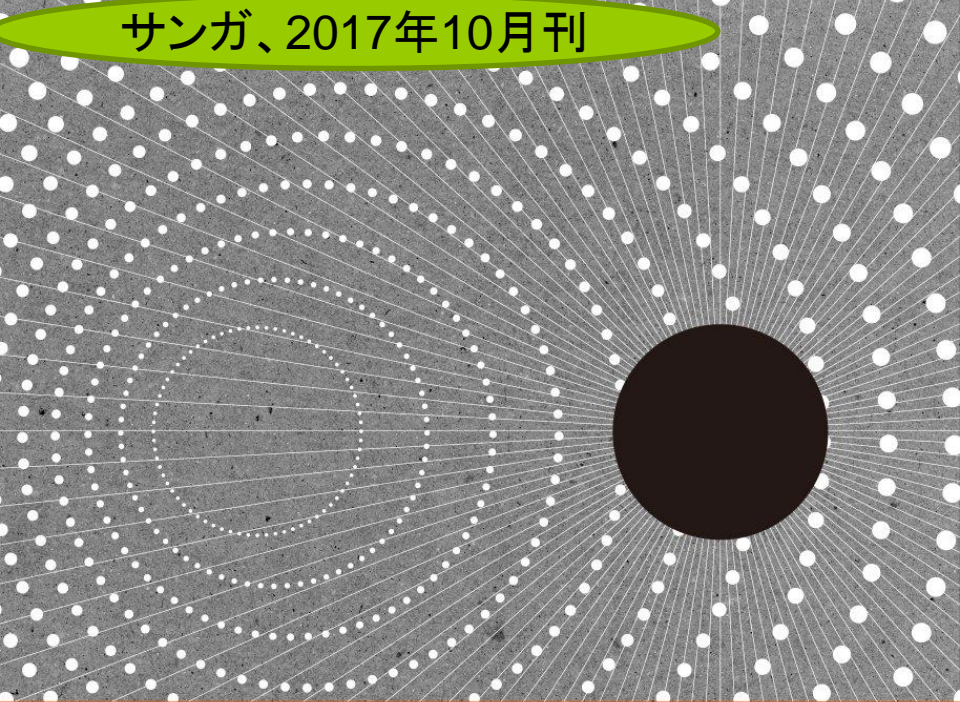
■ ③往生・脱落

■ ④称名念仏・只管打坐

# 科研:「身心変容技法研究会」の研究成果

サンガ、2017年10月刊

サンガ、2018年2月刊



身心変容技法シリーズ①

## 身心変容の科学～ 瞑想の科学

マインドフルネスの  
脳科学から、  
共鳴する身体知まで、  
瞑想を科学する試み

永沢哲  
齋木潤  
藤野正寛  
乾敏郎  
林紀行

井上ウィマラ  
河合俊雄  
長谷川千紘  
棚次正和  
加藤雅裕

安本義正  
内田樹  
町田宗鳳

〔編〕 鎌田東二

身心変容技法シリーズ②  
身心変容のワザ  
技法と伝承  
身体と心の状態を変容させる  
技法と伝承の諸相

〔編〕 鎌田東二

# 身心変容技法研究概念図

鎌田東二+小西賢吾+鶴岡賀雄+津城寛文他

## 「乱世」における身心の再生(世直し・心直し)

社会への還元  
(社会実践)

社会現実  
未来性

新たな身心哲学の構築臨床への応用法の確立

教育 医療・ケア  
セラピー

人間関係(倫理)

社会的な位置づけ

ワザから技術へ

研究成果

魂 モノ

場所性(聖地・霊場)

自然と人間

思想の解明と比較

現象のメカニズムの解明



研究方法  
(学・知)

文献

フィールド

実験

臨床

総合・全体的視点

### 身心変容技法

身心変容の場  
(自己実践)

修行

伝承

神秘体験

癒し

霊的暴力

スピリチュアリティ

暴力・闘争・戦争

ワザの体系

儀礼

芸術

生存・生業

治療

武術

宇宙性

宗教・思想と、その基盤を成す生態智

# 1、身心変容技法と霊的暴力 / 霊的虐待 / 霊的ハラスメント

- 「身心変容技法」—「身体と心の状態を当事者にとってよりよいと考えられる理想的な状態に切り替え変容・転換させる諸技法」  
そうした理想や理念とは裏腹に、それが「霊的暴力」(超越的な世界観に裏付けられた破壊性ないし破壊行為)を引き起こす。オウム真理教事件はた「身心変容技法」修行がもたらした霊的暴力の典型的な事件。
- 「霊的暴力 (spiritual violence)」—「宗教的暴力の中で、目に見えない霊的 (spiritual) なモノの存在 (spiritual being) や力 (spiritual power) によるさまざまなレベルでの圧迫や抑圧や破壊」  
目に見えないモノの力を使って(たとえそれが幻想やイリュージョンや共同幻想であっても、自他を傷つけ、壊し、支配。例:「呪い・呪詛・呪殺」)
- 「霊的虐待 (spiritual abuse)」—「意図的か非意図的かに関わらず、ある人物や集団に対して繰り返し破壊的行為を行なうこと」
- 「霊的ハラスメント (spiritual harassment)」—「霊的な世界観や力を背景にして悪質な嫌がらせをすること」

## 2、近代における「霊的暴力」を自覚した思想家

- フリードリッヒ・ニーチェ（1844 - 1900）  
『曙光』（1881）  
『この人を見よ』（1887）
- 鈴木大拙（1870 - 1966）  
『霊性的日本の建設』（1946）



# 「身体は大きな理性」(『ツラトウストラかく語りき』) 「精神の衛生学(健康法)」「あの深い生理学者・自己 救済の宗教の師」ブッダ

- 「神は死せり」と強迫神経症的に主張した19世紀の哲学者フリードリッヒ・ニーチェ(1844-1900)は、ルター派の牧師の息子で、ボン大学で神学と哲学を学んだ人で、24歳でバーゼル大学教授になった人であったが、
- 『この人を見よ』や『曙光』の中で、
- 「怨恨感情(ルサンチマン)」を解放する「あの深い生理学者仏陀」とか、「自己救済の宗教の師、ブッダ」と称え、
- 仏教を「衛生学」(Hygiene、健康法)と呼んでいる。
- ニーチェの提唱した「身体論的転回」

# ルサンチマンの解除とその陥穽

- ニーチェが指摘したような、「怨恨感情(ルサンチマン)」という負の感情を解放浄化する身心変容の「生理学」や「衛生学」は、昨今流行している「マインドフルネス瞑想」として現れている。
- だが、同時に、瞑想過程で起ってくるさまざまな負の事態にも注意しなければならない。

# 鈴木大拙『靈性的日本の建設』(1946年)

■ 冒頭の「戦争礼讃Laus belli(魔王の宣言)」の中で「魔王」の特性を

①力

②無意識

③狂信

④うそ

⑤恨み

とし、「魔王」はそれらの中に忍び込み発動すると強調。

■ 「魔王」は「力」を以て人間を支配し、ほしいままにする。

■ 「魔王」は「力」とずるがしこい策略によって人や物を支配し屈伏させ服従させる。

■ それはさまざまな「権力」や「武力」や「暴力」に関与する。

■ 「魔王」はあらゆる侵略的な権力や暴力の源泉。

■ 「魔王」は「力」をさまざまな形で駆使し、人間の「無意識」を動かし、「性」や「狂気・狂信」や「うそ」にはたらきかける。

## 「魔王」の弱みと「靈性」

併しこれは大きな声では云われぬが、自分にも悩みのないことはないのだ。原子爆弾で焼き尽くした焦土の中から青々と芽を出す草があり木があることだ。大地の懐から太陽の光を仰いで出て来る不思議な力、この力はわしの力よりも強いのだ。これは魔性のものでない。力以上の力だ。不思議にわしの力を無力にしてしまうのだ。人間の奴はこれを**靈性的**だとか云って居るが、兎に角、怪しからぬ働きをする。わしと同じく人間の「無意識」に生きているようだが、わしの力ではその正体をつきとめられぬ。時にはその存在を無視しても見るが、どうもわしの思うようにならぬ場合がある。それが予期しない方面・・・或は予期不可能な方面・・・から、いつのまにか、頭を擡げて居るので困る。焼け野原から芽生える青草のような奴、**靈性**とか何とか云って居るが、こいつを一つ何とかしてやりたいが、これだけは、ままにならないのだ。それで余り大きな声では云われぬのだ。人間の耳へ入ると”とんでもない”ことになる。が、**この靈性的自覚から芽生える大悲と云うわしの見えざる相手、わしを遂には取りひしぐかも知れない相手・・・大敵ではあるが、自分としては出来るだけの魔神力でこれに抵抗して見せるぞ。相手もわしを負かすには容易ならぬ努力を要するのだ。わしは名にし負う魔王である。**

# 鈴木大拙の「魔王」論と麻原彰晃

- とすれば、麻原彰晃は鈴木大拙の言う「魔王」的特性を正確に体現している。
- 「グルのクローン化」などはもっとも「魔王」的発言・発動であろう。
- 仏教は本来「不殺生（アヒンサー・非暴力）」を戒律の第一に掲げていたにも関わらず、なぜ「オウム真理教事件」のような殺人事件が起こったのか？
- それを制御できる思想も制度も機能もなかった、あるいは弱かった、ということになる。
- その問題を考える視点として、「審神者」と「シンクロ能力」を取り上げる。

### 3、靈的暴力の事例検討

#### ～第一次大本事件とオウム真理教事件が問いかける問題点

- オウム真理教事件などに現れた「靈的暴力」を考えていく際、「鎮魂帰神」という大本の神道靈学的行法が孕む問題点は参考になる。
- それはさまざまな神懸りの現象を誘発し、そこから不敬罪という第一次大本事件(大正10年,1921)の起訴容疑をも生み出した。
- そもそも鎮魂帰神は、本田親徳や長澤雄盾らに始まる、神懸り(帰神)する「神主」とそれを目撃・制御・対面・対話・査定する「審神者」が対座して行なう憑靈的身心変容技法であった。
- 「鎮魂帰神法」を提唱した本田親徳は、「鎮魂の法」は「天授の神法にして現世神界の学則」なので、これをよく実修して、「靈魂の運転活動を学習すべし」と説いている。
- 対して、「帰神の法」は「幽祭の法」であり、「神界に感合する道」であるという。
- 要するに、「鎮魂帰神法」とは、自他の靈魂の由来と行方を訊ね、神界探究のための自学自習の身心変容技法であった。

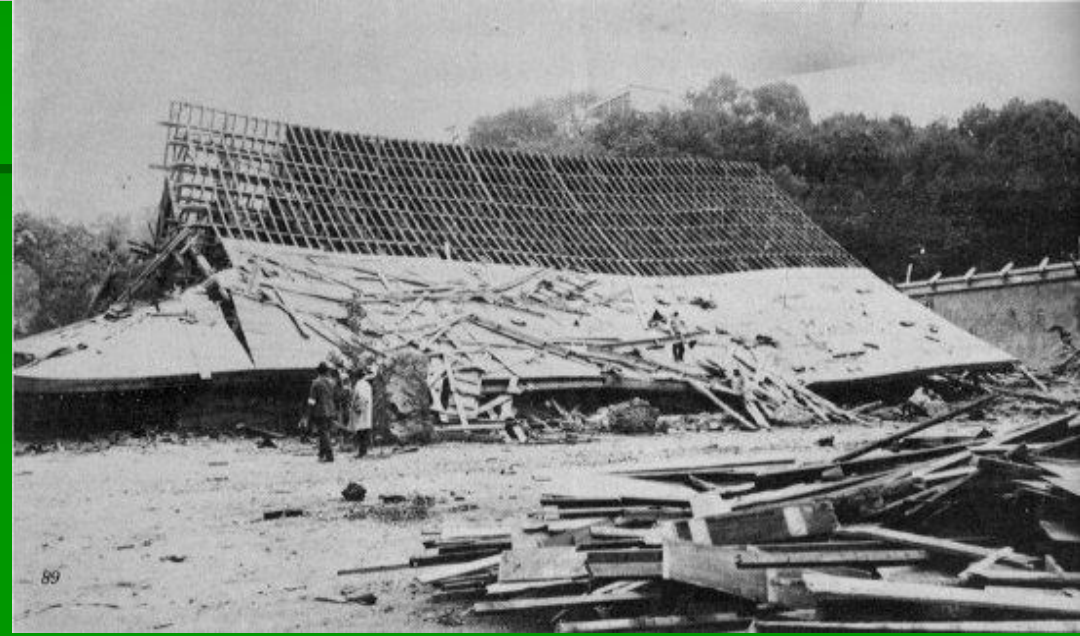
大正10年  
7月27日  
破壊前の本宮  
山上の神殿

大正10年10月  
大本不敬事件で  
破壊された本宮  
山上の神殿



上：破壊前の本宮山上の神殿（大正10年7月27日）  
下：大本不敬事件で破壊された本宮山上の神殿（大正10年10月）

# 昭和10年(1935)の破壊前のみろく殿と 昭和11年(1936)の破壊後のみろく殿



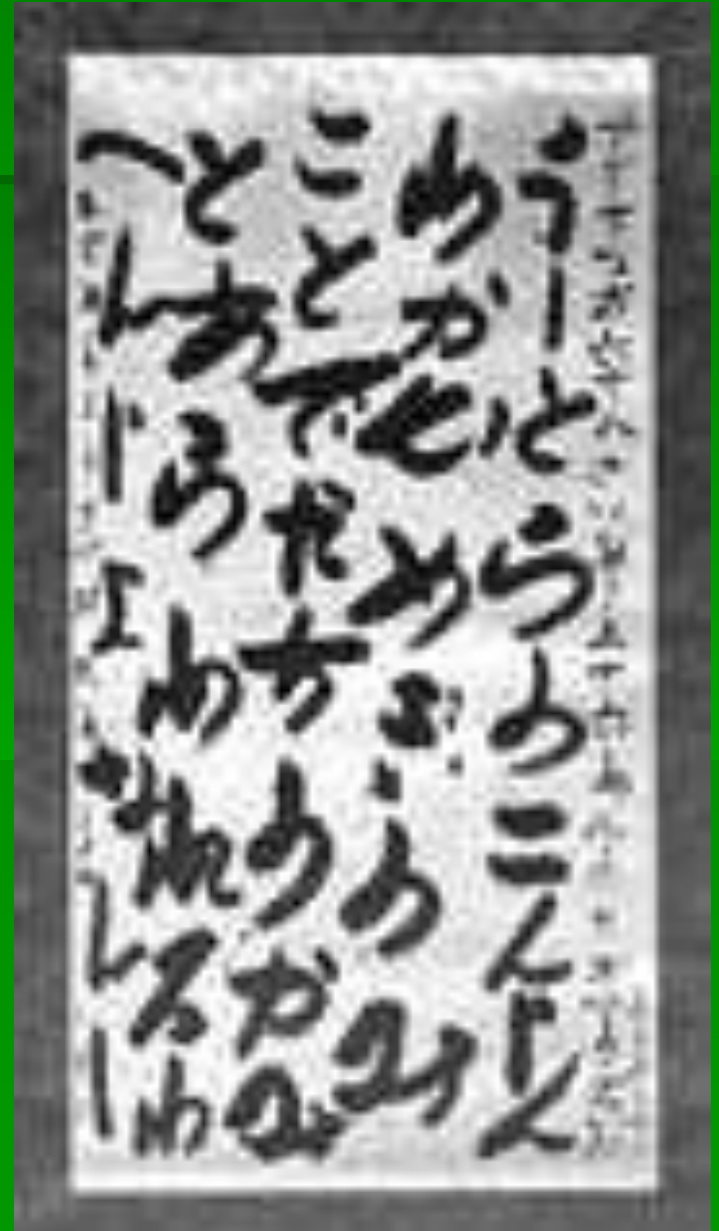


# 出口なおの「筆先」と出口王仁三郎と「霊学」

「良の金神」の発する「お筆先」 「内部生命の探究」としての「霊学」



# 出口ナオのお筆先



# 出口王仁三郎の書画



# 「鎮魂帰神」という身心変容技法の問題点の考察

- 憑霊現象において、
- 「我は\* \*大神であるぞよ。……せよ」  
などという「託宣」やメッセージが発せられることがあるが
- そこでの最も深刻な問題点は、その発話の真偽や懸かってくる神々の神格の特定などが適切に行われるかどうか、  
である。
- 言い換えると、そこで起こる神懸りや託宣などの身心変容を、  
「審神者」が、  
どう査定(審神)し制御できるか、である。

- もしその際に制御不可能な状態が発生すれば、それが自我のインフレーションや自己肥大幻想の拡大という深刻な事態が発生する。
- ニーチェの前掲言説を敷衍するなら、「ルサンチマンの屈折拡大」が表出される事態が発生する。
- 大本の場合、第一次大本事件が起こることによってこの危険性が曖昧にされ、「審神者」の質の担保や規準の問題が残された。
- 大本を出て神道天行居を開いた友清歡真や、不敬罪と新聞紙法違反で出口王仁三郎とともに検挙され、後に日本心霊科学協会を設立することのなる浅野和三郎は、そのような問題点を自覚しつつ、その問題意識を霊学ないし心霊科学として引き継ぎ展開したが、それもまた未完である。

# 浅野和三郎「鎮魂帰神に就きて」

(『神霊界』45号、大正6年3月1日号、大日本修斎会、1頁)

- <日本及び欧米各国にて普通遭遇する霊的現象は、勿論その人の守護神の発動なり。

- 幸ひ其守護神が最初より善良有力なれば、其結果は良好なれど、通常善霊は容易に発動せざるが故に、多く発動する者は九分九厘まで悪劣なる守護神の発動なりとす。

- 危険害毒は実に此間より湧出す。>

# ここで、注意しておきたいのは、

- 出口王仁三郎(1871 - 1948)の

芸術性 と

ユーモア

です。

これが、一種の、解毒作用になる、という点です。

# もう一点、担保は、倫理性の確立です。

- 出口王仁三郎は、大正2年(1913)に、歌集『東の光』に収めた次の歌を作っています。

- 霊学をまなぶは良けれわが心

洗ひ清めしその上にせよ

- 霊学の術(わざ)まなばんと欲(ほ)りすれば

とかく心の根城かためよ

- 霊学はこころを清め身をねりて

世人をすくふ神のまさわざ



# 「神秘的合一」という陥穽についての考察

- 一般化して言えば、ここには、密教や諸神秘主義が目指す「三密加持」や「天人合一」などの神秘的合一思想が共通して内在させている問題点や危険性がある。

- オウム真理教教祖麻原彰晃が「最終解脱者」であるという査定(審神)がどのようになされたのかも、ここに関わる。

- また「身心変容技法」が内包強化するシンクロ能力(合一同調能力)の強化と拡大が、制御不可能となる自我肥大を生み出し、自他の破壊につながることに注意が必要。

- これまで私は『宗教と霊性』（角川選書,1995年）、『エッジの思想』（新曜社,2000年）、『呪殺・魔境論』（集英社,2004年）などで、「魔」、あるいは、「魔境」の問題として、オウム真理教事件と麻原彰晃を取り上げてきた。

- 身心変容技法という観点からオウム真理教を見た場合、そこでの身心変容をもたらす修行は多くの問題を孕んでおり、教祖麻原彰晃を含め、出家者・在家者の信者修行者のさまざまな「魔境」と「偏差」（偏り）を生み出した。

- 問題の一つは、過剰に「超能力」や「神秘体験」や「イニシエーション」の獲得成就を求め、それにこだわったところから生まれてくる身心変容や修行者共同体内のアンバランスであり、とりわけ、性と慢と暴力（力による支配と殺傷行為）として顕在化した。

- 初期の過剰な性的イメージや性器刺激は仏教修行を標榜したオウム真理教の第一の問題点（負の局面）であった。麻原彰晃はタントラ仏教やヒンドゥー教的伝統などの自己流理解と実践により、鈴木大拙の言う「魔王」の好む「性の力」を全面に取り込み、偏差に満ちた「イニシエーション」の体系と階梯を生み出した。

- 第二に、内的暴力としても発現し得る「性の力」の取り込みが「自我のインフレーション」や絶対支配の全能感や慢を促進し、自らを「最終解脱者」から、さらに「王」や「教皇」に祀り上げて自己神格化し、その絶対支配に敵対する人々や勢力を「ポア」と称する外的暴力としての殺傷していく暴力の前景化を生み出す。

- つまり、「性の力」と「絶対権力」の行使が麻原彰晃の「霊的暴力」として顕在化したと言える。そして、麻原を絶対的な権威者・権力者である「教祖・開祖・尊師」として戴く体制(教団組織・幹部組織)を諸種の「イニシエーション」を駆使し装置化して作り上げ、麻原の妄想的な思想と計画を実体化することになった。

- その一方で、活動初期の1986年には、『超能力「秘密の開発法」すべてが思いのままになる！』(大和出版、1986年3月刊)の中で、「傲慢にならないために、他人に仏性・神性を認めて、学んで奉仕すべきである」「様々な生き物は、一つの生命体の中の細胞のような者で関係し合っている」「選民思想はだめだ」などと述べ、「魔境」についての自戒の言葉も発していたが、しかし麻原は、「傲慢・魔境」の境に深入したのである。

# 偏差や幻想肥大や暴走を防ぐ道

- そのことは、本発表の論点から言えば、厳格なる「審神者」が出来ていなかったということになるが、そもそもそれはどのようにして可能なのか？→他の発表者の発表を参照
- 麻原彰晃自身は、初期(1986年頃)に、すでに、
  - ①正しいグルを持つ、
  - ②功德を積む、
  - ③強い信を持つ、
  - ④行の種類を少なくする、

と修行の指針を弟子に示していたが、「グルのコピー化・クローン化」に突き進み、「マハームドラー」を弟子たちに仕掛けて犯行に及んだ。

# 「グルのコピー化・クローン化」

## と弟子のシンクロ能力の練磨の問題点

- 『生死を超える』(1986年)「透明な鏡—グル」:「私の経験を相手のコーサル体とアストラル体に、直接コピー」するとも、「コピーには、1. 私も相手も同じヴィジョンを見ている。2. 私は、相手に自分の透明さと修行経験を移す代わりに、相手のカルマを受けている。という特徴がある」
- 1986年3月21日 - 24日丹沢集中セミナー:「グルが与えたね、あなたはこれをやってはいけない、これをやりなさいということに対して、絶対服従することだね」
- 同年1月説法:「グルのためだったら死ぬる、グルのためだったら殺しだってやるよと、こういうタイプの人、クンダリニー・ヨーガに向いてるということになる。グルがやれといったことをすべてやれる状態、例えばそれは殺しを含めてだ、これも功德に変わるんだよ。例えばグルがそれを殺せという時は、例えば相手はもう、死ぬ時期にきている。そして、弟子に殺させることによって、その相手をポアさせるというね、一番いい時期に殺させるわけだね」

# 問題点の考察

- ①断言力への屈服と服従～批判・懐疑能力の自発的削除～「マハームドラー(偽装的煩惱破壊)」という仕掛け、恐怖による思考停止(地獄に墮ちるなど)
- ②「絶対」言語化の魔力～「絶対服従・絶対帰依」
- ③「シンクロ能力」の無批判的ななし崩しの発現  
～「グルのコピー化・クローン化」
- ④「聖無頓着」と「マハームドラー」による「クローン化」という「霊的暴力」の行使と解毒法(出口王仁三郎の芸術とユーモア～自己相対化の技法と倫理性の確立)

全く同列に比較することはできませんが、

- 死後もなお、

出口王仁三郎も、麻原彰晃も、

大きな(霊的・霊性的?)影響を

を与え続けています。

- 以上で、私の発表を終り、

続く4名の発表に移ります。